

国語辞典

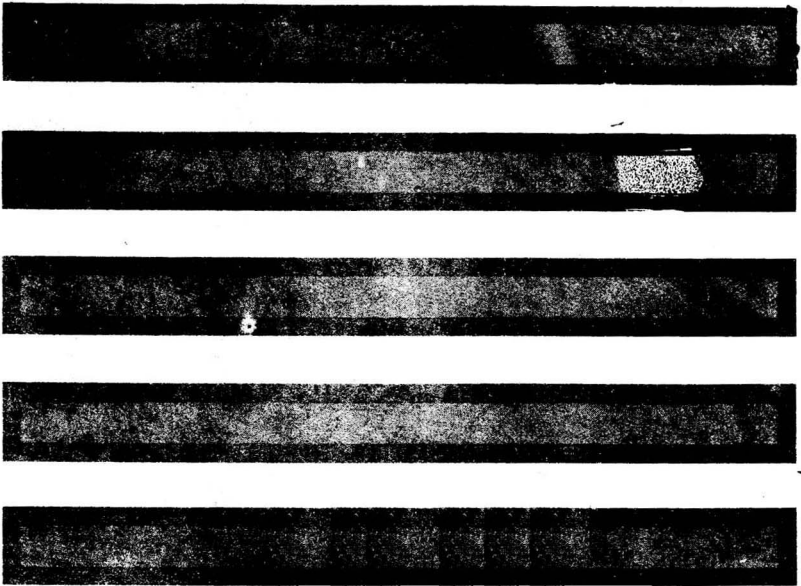
新版

大活字版

旺文社
国語辞典

新版

大活字版



編者 守随憲治 今泉忠義 松村明



旺文社の事業

<p>事業</p> <p>模擬試験・実力テスト 全国学芸コンクール 進学積立プラン</p>	<p>放送</p> <p>大学受験ラジオ講座</p>	<p>書籍</p> <p>日本歴史展望 教科別学習大事典(エポカ) 学芸百科事典(エポカ) チャイルドエポカ 学習図鑑・科学書(コスモス他) 文庫・児童書・スポーツ書 辞典・事典・語学教材 教科書 高校英語・数学・国語 高 校 生 向 学 習 参 考 書 中 学 生 向 学 習 参 考 書 小 学 生 向 学 習 参 考 書</p>	<p>雑誌</p> <p>中一時代 中二時代 中三時代 高一時代 高二時代 高三時代 大学受験講座 ラジオテキスト 就職ステップ O M N I (オムニ)</p>
--	-----------------------------------	--	---

【関連団体】

- 〈国際誌の刊行〉 旺文社インターナショナル
- 〈通信教育〉 財団法人 日本英語教育協会
- 〈LL教室〉 財団法人 日本LL教育センター
- 〈学生のホテル〉 日本学生会館

□「図書案内(小、中、高・一般別)」送呈。 〒162東京都新宿区横寺町 旺文社

●旺文社のマークが新しくなりました。これは情報産業と教育産業の動的な連携と、(旺)の文字が意味する「昇る太陽の躍動、ダイナミックサンライズ」をかたどり発展する企業イメージを表したものです。このマークは、1984年ロサンゼルス・オリンピックのシンボルマークをデザインしたロバート・M・ラニアンによって制作されたものです。

旺文社 国語辞典 [大活字版]

1982年1月20日 初版発行
1983年 重版発行

編 者 守 随 憲 治
今 泉 忠 義
松 村 明
赤 尾 好 夫
中 山 行 雄
共 同 印 刷 株 式 会 社
開 成 印 刷 株 式 会 社
株式会 社 市 川 製 本 所
清 水 印 刷 紙 工 株 式 会 社

発 行 所 株 式 会 社 旺 文 社
1 6 2 東 京 都 新 宿 区 横 寺 町
電 話 (編 集) 0 3 - 2 6 6 - 6 3 5 6
(販 売) 0 3 - 2 6 6 - 6 4 1 6

乱丁・落丁はお取りかえします。本社に直接お申し出ください。

編者のことば

人間の社会生活において、言語の果たす役割はまことに大きい。それによって人々は意思を通じ合うことができる。また、文化の蓄積・伝達・伝承のための手段として言語の機能は重要である。そして、人間がものごとを考えるとき、言語は思考のささえになる。ところで、言語はいつも同じ状態でとどまることなく、時代とともに変化する性質をもつ。一つの言語が他の言語に影響をあたえることも多い。われわれの国語に限ってみても、近年の交通機関や通信機関の著しい発達で世界はせまくなり、外国語の影響もますます大きくなっている。また、新語が生まれる一方で使われないうことばもでてくる。現代語を収める辞書としては、変化することばを究明して、たえず脱皮をはかり、内容の吟味を継続して行う必要がある。

「旺文社国語辞典」が世に出てすでに二十二年になる。一九五八年に誕生し、その後一九六五年、一九七〇年、一九七三年と三回にわたって改訂を行ってきた。その間、私たちはこの辞典を常に時代の要求に応えられる清新な国語辞典とすることを念願して努力を重ね、それは幸いにして学生諸君をはじめ一般社会人の方々にも広く愛用されてきた。

今回の改訂で特に力を注いだのは、語彙の再検討、新語の増補のほか、語釈を徹底的に吟味し、生きた用例の収録につとめたことである。そのほか、本書の初版以来の特色である独特の見出し項目と、特設欄による多角的解説をさらに充実させたこともあげておきたい。具体的には、固有名詞、和歌・俳句、故事・ことわざ・慣用句、重要な一字の漢字まで見出しに立て、また、注意・参考・語法・故事の各欄に加え、新たに語源・用法の欄を設けたことなどである。さらに、今回の改訂において「常用漢字表」を新たに採用し、全面的に新しい国語の書き表し方を示した。新時代の国語生活に十分活用され、役立たずのものとならう。なお、今回の改訂にあたって山口明穂氏をはじめ青木一男・安西勉夫・飯田満寿男・中村幸弘・森昇一の各氏には編集委員として、終始献身的なご協力をいただいた。執筆面で多大のご支援を賜った学友諸氏とあわせて深甚の謝意を表したい。

刊行にあたり

戦後すでに三十五年の歳月が経た。現代の二十年、三十年はよく過去における何百年と同等にみだてられ、物事の急速な変化や発展ぶりが強調される。時代の流れはまことに激しいものがあり、現代の国語についてみても、高度化した科学文化、社会生活を反映して、それはますます複雑多岐になりつつある。このような時代には、ことばの知識や情報を収める国語辞典の役割はいっそう重要なものになってくる。

旺文社国語辞典は、一九五八年の初版刊行以来、たえず時代の要請に合致して、広範な用途に応じられる立体的辞典として好評をばくしてきた。これまで、三度にわたる改訂で収録語彙の拡大と内容の充実をはかってきたが、今回、さらに全面改訂を行うことにより、より利用度の高い辞典として、新しい時代の国語生活に役だつことを願った。

今回の改訂の主要な点をとりあげると次の通りである。まず版面を大きくして収録量をふやし、語義解説など内容全般に拡充をはかった。次に、収録する語彙を再検討し、新語、外来語、時事語も的確な選択を行って大幅に増補した。また、語釈を徹底的に再吟味し、用例も、より適切なものを厳選して収録した。さらに、本辞典の特色である学習性を強化し、従来の「注意」「参考」「語法」「故事」の各欄に加えて「語源」欄と「用法」欄を新設した。

なお、今回の改訂では、「常用漢字表」を採用し、全面的に新しい国語の表記基準を示した。日常の学習、実務に十分活用していただきたい。以下この辞典の特長とするところをあげてみよう。

一、学習と日常生活に必要なあらゆる分野のことば約七万六千語を収録した。

現代の国語を中心に、主要な外来語、漢語、古語、新語、百科語などを幅広く収めて、各科の学習にも、また複雑さを増している現代社会の国語生活にも即応できるものとした。

一、固有名詞、和歌・俳句、故事・ことわざ・慣用句を豊富に収めて国語学習に万全を期した。

故事・ことわざ・慣用句などとともに、中学・高校の教科書、あるいは新聞や雑誌によく出る人名・地名・書名などの固有名詞、和歌・俳句など、通常の国語辞典にはみられない項目をも見出しに立て、解説を施した。これらのうち、「故事・ことわざ」「和歌・俳句」の二項目については、巻末付録に索引を設けて学習しやすくした。

一、「常用漢字表」を新たに採用し、全面的に新しい国語の書き表し方を示した。

国語審議会によって長期にわたり検討され、先にまとめられた「常用漢字表」を全面的に採用、現代国語表記の基準を示した。現代かなづか

新送り仮名とあわせて、最新の国語の書き表し方を示すものである。

一、語義解説は簡明・正確・平易を期し、適切な用例を示して語義理解に役だてた。

語釈・説明は、簡潔・正確でしかもわかりやすいものとするよう工夫し、活用度の高い重要語には徹底的解説を施した。さらに適切な用例をできるだけ多く示して、語義を正しく、より深く理解できるように努めた。

一、高い実用性と学習性をもつ本書独自の欄を豊富に設けた。

語義解説、用例だけでなく、必要に応じて、「語源」「用法」「語法」「注意」「参考」「故事」の各欄を設けて、関連事項をできる限り広く深く解説し、より高い実用性と学習性を盛り込んだ。

一、漢字を重視し、大見出しの漢字を掲げて解説を徹底させ、漢字辞典の機能を加えた。

日常生活で、使われることの多い漢字、総数約二四〇〇字を一字の漢字として大活字で掲げ、その音訓と字義解説、さらに参考事項の解説を示して、漢字辞典としても十分利用できるものとした。また巻末付録に「筆順つき漢字音訓表」も設けた。

一、国語の学習はもちろん、日常生活や実務に直接役立つ豊富な記事を付録として巻末に収めた。

付録には、「国語表記の基準」「敬語の使い方」「日本語の発音とアクセント」「国文法要覧」「世界文化史年表」など国語の学習と実用に直接役立つ十五項目を掲げて、この辞書の利用度を一段と高いものにした。

おわりに、新版刊行にあたり、立案から校正に至る長い期間、熱心なご指導とご労苦を賜った編者と編集委員の方々を中心に心から謝意を表したい。また執筆校正に多大のご協力をいただいた方々を左に記して、厚くお礼を申しあげる次第である。

荒木雅実・伊東倫厚・岩井堯彦・岩下裕一・岡田 潔・沖森卓也・加島直吉・木下和子・黒瀬 崇・小久保崇明・近藤泰弘・佐藤喜一・島田耕治・平館英子・田貝 晃・竹中泰正・多田一臣・立平幾三郎・千葉 豊・成清良孝・西田絢子・花輪茂道・藤原克己・松原純一・身崎 寿・山崎一穎・和田 強（敬称略、五十音順）

なお、巻末付録「日本語の発音とアクセント」をご執筆賜った平山輝男先生に深く感謝申し上げます。

最後に、この辞典の編者である今泉忠義先生が先年亡くなられた。初版以来、先生には絶大なご尽力を賜った。改めて深く感謝するとともに、心からご冥福をお祈りする次第である。

この辞典のきまりと使い方

〔一〕 見出し語の範囲

この辞典は、日常の言語生活を円滑に進めていく上で欠くべからざる知識を求めて作られたものであって、見出し項目として掲げたものはその目的にかなうよう、現代の日本語を中心とし、主要な外来語、百科語、古語、固有名詞（人名・地名・作品名など）、慣用語、ことわざ、故事成語、著名な和歌・俳句、および二四〇〇余字の漢字である。

〔二〕 見出し語

(1)原則として現代仮名遣い・太字で表記した。ただし、

〔外〕外来語は片仮名で表記した。

(4)古語・百人一首は歴史的仮名遣いで表記したが、古語・現代語にわたるものは現代仮名遣いで見出しを表記した。

例 **いらふ**【答ふ・応ふ】がらふ(自下二)【土古】たえる。返答をする。
たちかえる【立】ち【返る】かへ【自五】かへ【たむ】かへは接頭語

①かえる。②引き返す。③古くひかへす。同類たちかえれる(自下一)

(2)一字の漢字(大活字)のものは、字音を見出しとした。
 (3)見出し語を構成する要素を「」を用いて区切り、語の構成を明らかにした。

例 **あさひ**【朝日・旭】
やまてくら【山桜】

ただし、
 (7)単語と単語が連なった場合は最小単位に区切らず、意味のとりにやすいように単語と単語を大きく区切った。

例 **じゆうしゅぎ**【自由主義】
ねつりょう【熱容量】
あいべつりく【愛別離苦】

(4)固有名詞・枕詞まくらことば・慣用語やことわざなどは、一部を除いて「」をほ

ふいた。

(4)活用語は原則として終止形を掲げ、語幹と語尾の区別を「」で示した。形容動詞は語幹を掲げた。

例 **あそぶ**【遊ぶ】
すずしい【涼しい】

あきらか【明らか】

(5)副詞に「と」あるいは「に」がついてもつかなくても使われるものは、つぎの形式によった。

例 **かるがる**(と)【軽軽(と)】
いっこう(に)【一向(に)】

(6)和歌・俳句は、第一句目を平仮名で見出しとした。

例 **ひさかたの**…【和歌】(久方の 光のどけき 春の日に……)

(7)三字以上の見出し語(漢字一字の字音語の場合は除く)に、他の語がついてきた複合語は、その見出し語の後に一括して掲げ、親見出しに当たる部分は「」で掲げた。これらはそれぞれ行を改めて掲げた。ただし、検索の便宜上、この形式をとらず、独立見出しとしたものもある。

例 **こうとう**【高等】
がっこう【学校】
どうぶつ【動物】

(8)ある見出し語に、他の語句がついてきた慣用語・ことわざ・格言などは、その見出し語との重複部分に「」を用い、平仮名・太字で表記し、漢字を()に包んで示した。冒頭部分が活用語で、見出しと語形のかわる場合は「」を用いず、全形を掲げた。これらは、行を改めず追い込みで掲げた。

例 **あき**【秋】…………… —のおうぎ(扇)……………
 —た(立)つ…………… —のそら(空)……………

あたゝる【当】たゝる……………
 あたらず【当】たらず……………

検索の便宜上、独立見出しで掲げたものもある。
 例 **いわぬがはな**【言わぬが花】

(9) 接頭語には見出しの下に、接尾語には見出しの上に「」をつけた。

例 うち「打ち」
たち「達」

あい「相」
はむ

〔三〕 見出し語の配列

見出し語は、つぎの順序によって配列した。

(1) 五十音順

(2) 清音・濁音・半濁音の順

例 はん「班」
はん「番」
パン「麵包」

(3) 促音・拗音・直音の順

例 てっき「鉄器」
てつき「手付き」

(4) つづりが同じ場合―語の種類と品詞別によってつぎの順に配列した。

① 一字の漢字 (大活字) ② 接頭語 ③ 接尾語 ④ 名詞 ⑤ 代名詞

⑥ 自動詞 ⑦ 他動詞 ⑧ 補助動詞 ⑨ 形容詞 ⑩ 形容動詞 ⑪ 連体詞

⑫ 副詞 ⑬ 接統詞 ⑭ 感動詞 ⑮ 格助詞 ⑯ 接統助詞 ⑰ 保助詞

⑱ 副助詞 ⑲ 終助詞 ⑳ 間投助詞 ㉑ 助動詞

ただし、一字の漢字と同じ漢字表記をもつ接頭語・接尾語・名詞は

検索の便宜上、一字の漢字の直後に配列した。

(5) 配列の上での外来語の長音「ー」の扱いは、「ー」の前にくる音の母音により、アイウエオのいずれかに当たるものとみなす。例えば、ターミナルはターミナル、チーズはチイズ、ブルはブル、キーキはケエキ、クロスはクロオスとみなして配列した。

〔四〕 見出し語の書き表し方

(1) 見出し語の書き表し方を「」の中に示した。いくつかの単語が結びついてある連語等については「」の中に示した。仮名は、原則として平仮名を用い、現代仮名遣いで示したが、見出し語が古語の場合は、歴史的仮名遣いで示した。

(2) 「常用漢字表」にある漢字の字体は、「常用漢字表」に従った。

(この辞典のきまりと使い方)

(3) 送り仮名は、昭和四十八年六月内閣告示「送り仮名の付け方」(昭和五十六年十月内閣告示にて一部改正。三三二ページ参照)に従った。送り仮名ははぶくことの許容される語は、つぎのように示した。「」に包まれているものは、はぶいてもよいことを表す。

例 たらえ「田植(え)」
うりあげ「売(り)上げ・売上」

送り仮名ははぶくのが本則の場合は、許容を()に包んで示した。

例 おこなう「行(う)・(行)なり」
(4) 「」の中の漢字につぎの記号をつけて漢字の種別を示した。ただし、固有

名詞、慣用語など、および中国語にはこの記号をはぶいた。

△ 「常用漢字表」にない字

× 従来あて字と考えられた字

(5) 外来語の原語つづりは()の中に示し、英語を除いて該当する国語名を略

語(ヘーゲル「略語・記号表」参照)を用いて示した。

例 カプセル「Kapsel」
モンタージュ「montage」
たばこ「tabaco」
キョーザ「中餃子」

キョーザ「中餃子」

(6) 英語のつづりは、米英両式がある場合は原則として米式とし、また、いわゆる和製英語は「和」の略語をつけた。

例 ユーモア「humor」
ナイト「(right)」

〔五〕 歴史的仮名遣い

(1) 見出し語の表記形「」の下に歴史的仮名遣いを片仮名で示した。

(2) 見出しが歴史的仮名遣いで表された古語には、現代仮名遣いを平仮名で示した。

(3) 見出しの仮名遣いと一致する部分は、語構成単位に「」で示した。

例 けいこう「傾向」
ゆふとつくと「夕。月夜」

〔六〕 品詞および活用

- (1) 見出し語には、品詞および活用の型を()に包み略語で示した。ただし、名詞だけの場合は品詞名を省略した。(ページ「略語・記号表」参照)
- (2) 品詞の分類および活用の種類については、基本的には現行の学校教科書の一般的なものに従った。ただし、一部のものについては、さらにくわしくつぎの形式によった。

〔名詞のうち、代名詞は(代)として区別した。〕

- (4) 普通名詞のなかで、動詞のサ変および形容動詞の語幹となるものについては、それぞれ品詞名を併記し、語尾活用の基本形を示した。

例 **めいき**【明記】(名・他スル)
おん・わ【溫和】(名・形動文)

- (ウ) 動詞は、自動詞・他動詞・補助動詞の区別を示した。
- (ニ) 助詞はつぎの六分類に従い、それぞれ略語で示した。

- 格助詞・接続助詞・係助詞・副助詞・終助詞・間投助詞
- (3) 口語の動詞・形容詞・形容動詞・助動詞、および文語の助動詞には各活用形を示した。

- 〔未然形・連用形・終止形・連体形・仮定形(已然形)・命令形の順に「・」で区切った。〕
- (4) 一つの活用段に二つ以上の形がある場合には、一方を()で包み、活用形のない段には「〇」を入れた。

例 **ただし・い**【正しい】(形) ただし・い
ただし・い

- (ウ) 名詞とサ変動詞、名詞と形容動詞のように二つ以上の品詞に属するものは活用形を省略した。

- (4) 助動詞は、(助動下一型)(助動形動型)のように、活用の型を示した。
- (5) (外)の標示は、口語では見出し語に「と」がついて副詞、「たる」がついて連体詞となることを表す。文語では「タリ活用」といわれるものである。

例 **どうとどう**【堂堂】(外)

- (6) 二つ以上の単語が合わさってきた複合語も一語意識の強いものは単語として扱い、いずれかの品詞名を示した。

- (7) 二つ以上の単語が結びついている連語で、ふつう、漢字を含んで書き表さないものは、(連語)として示した。ただし、見出し語の書き表し方を()

の中に示したもので、独立見出しでないもの(二)(三)(八)のような例)には連語標示はしなかった。

〔七〕 語釈・解説、および用例

- (1) 古語・俗語・方言・枕詞まくらことばなどの語の種類、百科語の区分は、それぞれ略語を用いて標示した。(ページ「略語・記号表」参照)
- (2) 語釈・解説は、その語の基本的な意味を明らかにすることにとめるとともに、現代語としての意味・用法をできるだけささないようにした。

- (3) 一つの見出し語に二つ以上の意味があるときは、①②③…を用いて分け、①②③…のそれぞれをさらに細分するとき、⑦⑧⑨…を用いて分けた。

また、品詞が異なって意味も異なるとき、および動詞で自動詞・他動詞・補助動詞があり、意味が異なるときは■□…を用いて分けた。

- (4) 語釈・解説にあたっては、できるだけ補足的説明、例えば原義、見出し語の漢字の字義に即した説明などを()に囲んで加えた。

- (5) 見出し語が口語の動詞、形容詞、形容動詞の場合には、語釈・解説のあとにその語と関係の深い語を掲げた。

〔見出し語が動詞の場合〕

- ① 他動詞に対する自動詞と、その活用型。自動詞に対する他動詞と、その活用型。また、見出し語の文語の語形と活用型。

例 **つら・れる**【連ねる・列ねる】(他下一) つら・れる

- ② 可能動詞(五段活用動詞が下一段に活用して可能の意をもつ動詞)

例 **うごく**【動く】(自五) うごく

- (4) 見出し語が形容詞・形容動詞の場合

例 **うつくしい**【美しい】(形) うつくしい

- (6) 対義語・対応語をつぎの形式で示した。

例 **あつ・い**【暑い】 あつ・い …… ひや・い【寒い】

ただし、対義語・対応語が、①②…で区分されたいくつかの語義に通用する場合は、それらの語釈のあとに()に包んで示した。

例 おもひ【重い】(形)おもひ、おもひ。①目方が多い。おもたい。「荷物がー」

②大切だ。重要だ。「一任務」③悪い。程度がはなはしい。ひどい。「病気がー」……………(軽)

(7)意味の理解を助けるため、必要に応じて用例をつぎの要領で示した。

例 現代語の用例は現代仮名遣い、古語の用例は歴史的仮名遣いで示した。

古語の用例には原則として出典を示した。「物語」「日記」「和歌集」などの出典名は、これらをはぶいて(源氏)〈更級〉(古今)などのように略称で示した。

(4)用例中の見出し語にあたる部分は「ー」を用い、見出し語が動詞・形容詞

などで、活用して見出し語と語形が変わる場合には、語幹を「ー」で、語尾は「ー」で区切って仮名で表した。

例 いたい【痛い】(形)いたい、いたい。①……………。「足がー」

②……………。「チャンスをつかしたはーかった」

(例)語幹・語尾の区別のない動詞、および助動詞の用例が活用して見出し語と語形が変わる場合は、見出し語に相当する部分を太字で示した。

例 みる【見る】(他上)みる、みら。①……………。「みればーほろ美しい」

せる【助動下一型】せる、せら。①……………。「使に行かー」②……………。「病

気のため休ませていたく」

〔八〕 一字の漢字

(1)「常用漢字表」にある漢字、人名用漢字、およびそれ以外で一般社会生活に

用いられることの多い漢字、約二四五〇字を収めてその字義を解説した。

(2)見出し 漢字の字音を見出し、「常用漢字表」に字音が二つ以上掲げられている場合は、そのすべてを見出しとして掲げ、字義解説はより一般的

と思われる字音見出しの項に掲げた。

(3)字体

(例)他の項目より大きい活字で「ー」の中に漢字を示した。

(例)「常用漢字表」にある漢字の字体は「常用漢字表」に、人名用漢字は人名用として示された字体に従った。

(例)「常用漢字表」にある漢字で、いわゆる新字体と旧字体との両字体がある漢字については、新字体の下にやや小さい活字で旧字体を掲げた。人名用漢字で旧字体のあるものは人名用漢字の字体の下に掲げた。

この辞典のきまりと使い方

(四)「常用漢字表」にない漢字には一般項目と同じ「A」を、人名用漢字には「入」を付けた。

(4)音訓

(例)字音を片仮名で、字訓を平仮名で示した。

(例)①「常用漢字表」にある漢字については、「常用漢字表」に掲げられている音訓は太字で示した。ただし、字訓については送り仮名の部分は細字

で示した。また、「常用漢字表」には掲げられていない音訓も、一般によく使われる代表的なものは細字で示した。②「常用漢字表」にない漢字の音訓は細字で示した。③字音には歴史的仮名遣いを添えた。

(5)字義、その他

(例)熟語を構成する成分としての字義をもれなく掲げ、各字義についての用例を「ー」に示した。

(例)字義解説のあとに、(例)には略語としての用い方などを、(例)には主として字体についての注意事項を、また、◇をつけてその漢字が特殊な読み

の熟語となる場合の例を示した。さらに、その漢字が人名として用いられる場合の読みを實際例にもとづいて(例)の下に示した。

(例)同じ意で使われる漢字をⅡで示した。

〔九〕 「注意」「用法」「語源」「語法」「参考」「故事」欄

見出し語の理解をいっそう深く徹底させるために、語釈・解説のほかに、つぎの欄を設けて多角的な解説を施した。

(1)注意 見出し語の読み方、書き方、使い方の上で誤りやすい事柄を指摘し、注意を要する事柄を解説した。

(2)用法 見出し語の、日常生活での正しい使い方に關する事項を解説した。

(3)語源 見出し語についてのより深い理解に役立つよう、その成立過程を解説した。

(4)語法 語の構成、語の文法を主とした用法、口語の助詞・助動詞の接続などを解説した。

(5)参考 見出し語と類語・関連語との区別や使い分け、語釈・解説を別の角度からみた説明、その他見出し語に關係する事項を解説した。

(6)故事 中国の古典に出るいわゆる故事を簡潔にわかりやすく掲げ、末尾に出典名をへに示した。

あいえんか【愛煙家】たばこの好きな人。

あいえんえん【台録奇録・台録機録】①男女、夫婦、友人等の間話など不思議な怪話をまとめたこと。②(参考)『新編』と『江戸一線』は異なる。

あいおい【相生い】①夫夫婦が互に長生きを望むこと。②(参考)『相生い』に通ず。

アイオーン【I.O.】(International Olympic Committee)の略(国際オリンピック委員会)。

あいか【哀歌】悲しい心情をたじた詩歌。悲歌。エレジー。

あいか【合鑑】①その疑に合つた別冊のこと。②長門県で、明の間にはいる三味線(行)の長い間奏。

あいかた【相手】①相手。②遊里で、その客の相手の遊女。

あいがも【合鴨・間鴨】①動「あおひる」と「まぶさ」の肉。②ある肉。

あいかからず【相変わらず】①副「変わらず」で、今までの如し。「元気で」。「元気で」。

あいかん【哀感】①悲しい感じ。②「を共にする」。

あいがん【哀願】①名「哀願」事情を述べ、人の同情心に訴へること。哀訴。

あいがん【愛玩】①名「他スル」大切にむかひがりの戀みとすること。①動物。

あいき【愛機】愛用してゐる飛行機・写真機など。

あいき【合】①着・間着。②上着と下着との間に着る衣服。

あいきどう【合気道】①武道の一つ。古流柔術の大東流を源流とし、当て身・関節技を主とする護身術。合気術。

あいきやう【愛敬】①古「愛敬」あつかひのやうなやさしい魅力。②深くやさしい思いやりの情味。

あいきやく【相客】①同じ席に居る客。②宿屋で同じ部屋にどまの客。

アイキュー【I.Q.】(Intelligence quotient)の略。知能指数。知能の発達を数字で表した。参考「I.O.」が標準で、それの大きければ優良。

あいきやう【愛敬】①名「他スル」大切にむかひがりの戀みとすること。①動物。

あいき【愛機】愛用してゐる飛行機・写真機など。

あいき【合】①着・間着。②上着と下着との間に着る衣服。

あいきどう【合気道】①武道の一つ。古流柔術の大東流を源流とし、当て身・関節技を主とする護身術。合気術。

あいきやう【愛敬】①古「愛敬」あつかひのやうなやさしい魅力。②深くやさしい思いやりの情味。

あいきやく【相客】①同じ席に居る客。②宿屋で同じ部屋にどまの客。

あいくさ【合釘・間釘】①両端の釘がななめ。板さき合はる釘。②合釘。

あいくさ【合口口】①引かない短刀。鞘口と柄口が直接に合つてくる。②九寸五分。③話のまじりごと。④友「戦い」相手。「引かない」(鞘口は)首と書く。

あいくさ【愛敬】①名「他スル」大切にむかひがりの戀みとすること。①動物。

あいくさ【愛犬】①かわいがつて飼ふ犬。②犬がかわいがること。

あいくさ【愛顧】①目まかして引き立てること。ひいきいすること。①「一かた」(用)愛顧を受ける側からいふ語。

あいくさ【愛護】①名「他スル」かわいがり大切に守ること。①動物。

あいくさ【愛好】①名「他スル」愛し好むこと。①「切手」。

あいくさ【愛国】①自分の国を愛する。①祖國愛。

あいくさ【愛語】①言葉。①味方としてあつかひきめてあつたこと。①「山田」②団体や仲間の主張を短くして表した。標語。モットー。当商店会の一は「ピース第一」。

あいくさ【間駒】①将棋で、相手のまづ自分のまの間に防壁を置く。①「一家」。

あいくさ【愛妻】①妻をかわいがること。①「一家」。

あいくさ【挨拶】①名「自スル」①人に会つたとき別れるときにかす社交的なこと。②「は、また」その動作。③初対面の「敬意」祝意など多量の場面に人に送る。④「また、その行為」。

あいくさ【挨拶】①名「自スル」①人に会つたとき別れるときにかす社交的なこと。②「は、また」その動作。③初対面の「敬意」祝意など多量の場面に人に送る。④「また、その行為」。

あいくさ【挨拶】①名「自スル」①人に会つたとき別れるときにかす社交的なこと。②「は、また」その動作。③初対面の「敬意」祝意など多量の場面に人に送る。④「また、その行為」。

あいくさ【挨拶】①名「自スル」①人に会つたとき別れるときにかす社交的なこと。②「は、また」その動作。③初対面の「敬意」祝意など多量の場面に人に送る。④「また、その行為」。

あいくさ【挨拶】①名「自スル」①人に会つたとき別れるときにかす社交的なこと。②「は、また」その動作。③初対面の「敬意」祝意など多量の場面に人に送る。④「また、その行為」。

あいくさ【挨拶】①名「自スル」①人に会つたとき別れるときにかす社交的なこと。②「は、また」その動作。③初対面の「敬意」祝意など多量の場面に人に送る。④「また、その行為」。

あいくさ【挨拶】①名「自スル」①人に会つたとき別れるときにかす社交的なこと。②「は、また」その動作。③初対面の「敬意」祝意など多量の場面に人に送る。④「また、その行為」。

あいきさん【愛餐】(キリスト教で、教員がいつしよに食事)。

あいき【哀史】悲しい内容の歴史。また、その物語。悲史。

あいき【愛語】親がかわいがつてゐる子供。いとこ。

アイシー【I.C.】(Integrated circuit)集積回路。

アイシー【I.C.E.M.】(Intercontinental ballistic missile)の略。大陸間弾道弾。核弾頭を装備し、ロケットエンジン推進による約一万キロメートルの距離を超音速で飛行。戦路用長距離ミサイル。

あいき【愛日】①冬の日光。②時を惜しんでけむり。③孝心の深い。

あいき【愛車】①愛用の車。②自分の車を大事にすること。

あいき【愛着】①名「自スル」①「欲」にむかひがりの戀み。②「アイシャドウ」へ「eye shadow」目に陰影をけるためにまたに塗る。青・灰色などの化粧品。

あいき【哀愁】①名「自スル」①「欲」にむかひがりの戀み。②「アイシャドウ」へ「eye shadow」目に陰影をけるためにまたに塗る。青・灰色などの化粧品。

あいき【愛書】①名「自スル」①「欲」にむかひがりの戀み。②「アイシャドウ」へ「eye shadow」目に陰影をけるためにまたに塗る。青・灰色などの化粧品。

あいき【愛読】①名「自スル」①「欲」にむかひがりの戀み。②「アイシャドウ」へ「eye shadow」目に陰影をけるためにまたに塗る。青・灰色などの化粧品。

あいき【愛読】①名「自スル」①「欲」にむかひがりの戀み。②「アイシャドウ」へ「eye shadow」目に陰影をけるためにまたに塗る。青・灰色などの化粧品。

あいき【愛読】①名「自スル」①「欲」にむかひがりの戀み。②「アイシャドウ」へ「eye shadow」目に陰影をけるためにまたに塗る。青・灰色などの化粧品。

あいき【愛読】①名「自スル」①「欲」にむかひがりの戀み。②「アイシャドウ」へ「eye shadow」目に陰影をけるためにまたに塗る。青・灰色などの化粧品。

あいき【愛読】①名「自スル」①「欲」にむかひがりの戀み。②「アイシャドウ」へ「eye shadow」目に陰影をけるためにまたに塗る。青・灰色などの化粧品。

あいき【愛読】①名「自スル」①「欲」にむかひがりの戀み。②「アイシャドウ」へ「eye shadow」目に陰影をけるためにまたに塗る。青・灰色などの化粧品。

あいき【愛読】①名「自スル」①「欲」にむかひがりの戀み。②「アイシャドウ」へ「eye shadow」目に陰影をけるためにまたに塗る。青・灰色などの化粧品。

あいき【愛読】①名「自スル」①「欲」にむかひがりの戀み。②「アイシャドウ」へ「eye shadow」目に陰影をけるためにまたに塗る。青・灰色などの化粧品。

あいき【愛読】①名「自スル」①「欲」にむかひがりの戀み。②「アイシャドウ」へ「eye shadow」目に陰影をけるためにまたに塗る。青・灰色などの化粧品。

あいき【愛読】①名「自スル」①「欲」にむかひがりの戀み。②「アイシャドウ」へ「eye shadow」目に陰影をけるためにまたに塗る。青・灰色などの化粧品。

あいき【愛読】①名「自スル」①「欲」にむかひがりの戀み。②「アイシャドウ」へ「eye shadow」目に陰影をけるためにまたに塗る。青・灰色などの化粧品。

あいき【愛読】①名「自スル」①「欲」にむかひがりの戀み。②「アイシャドウ」へ「eye shadow」目に陰影をけるためにまたに塗る。青・灰色などの化粧品。

あいき【愛読】①名「自スル」①「欲」にむかひがりの戀み。②「アイシャドウ」へ「eye shadow」目に陰影をけるためにまたに塗る。青・灰色などの化粧品。

あいき【愛読】①名「自スル」①「欲」にむかひがりの戀み。②「アイシャドウ」へ「eye shadow」目に陰影をけるためにまたに塗る。青・灰色などの化粧品。

